

# ヴィトゲンシュタインの後期哲学について

——言語論哲学の基礎——

山 口 勲

## [ 1 ]

E・ゲルナーの《言葉と物》<sup>1)</sup>が公刊されると間もなく、タイムズ紙の投書欄に、この書物の評価をめぐる激しい賛否両論の投書が載り始めた。ことの起りは、《言葉と物》を発行したゴランツ社が、哲学雑誌マインドにこの本の書評を求めたとき、編集者G・ライルがこれを拒否したことに始まる。ライルは、英国哲学界を席卷する日常言語学派の旗手である。他方ゲルナーの本は、この学派に対する徹底的な批判の書である。加えて、B・ラッセルがその序文を書いている。何も起らぬ方が不思議であろう。まず攻撃は、ラッセルの《拒否された書評》と題する一文によって開始され、ライルが直ちに受けて立った。続いてラッセル派とライル派が激しく射ち合った。論戦は、ゲルナーの本がライルのいう如く単に悪口雑言の書かどうか、従ってマインド誌に学術上の問題として書評する価値があるかどうか、の応酬にほぼ集中した。だからこの論戦そのものに、学問的成果を期待することはできない。しかし、この事件の背景と意味を推察すると、その影響力は非常に大きいと思われる。冷静に読む者にとって、ゲルナーの本はライル派が否定しようとも、単なる悪口雑言や揚足取りの書とはとうてい思えない。それは日常言語学派に対する初めての、本格的体系的な批判の書であることを認めねばならない。それはかなりの説得力をもつ本であった。

だがよく考えてみると、ゲルナーの本は実際のところ、誰の誰に対する挑戦だったのか。序文をラッセルが飾り、次のようにいっている。「ゲルナー氏の著書《言葉と物》は、現在オックスフォードに流行している言語論的哲学を是認できないあらゆる人々から、必ず感謝されるであろう。」ライルに挑んだのもラッセルである。ゲルナーの背後にはラッセルが立つ。だがライルの背後には誰がいるのか。ゲルナーの本の扉には、ラッセルの次の文章が掲げられている。「後期のヴィトゲンシュタインは……真面目な思索に疲れてしまい、そういう活動を必要としない学説を發明したように思える。こういう怠惰な結果を生む学説が真理であるなどと、私は瞬時たりとも考えたことはない。」こうしてみると、ゲルナーの本のめざしているもの、ラッセル派とライル派の戦いの背景には、実はラッセル対ヴィトゲンシュタインの戦いが浮んでくる。少なくとも、ラッセルはこれを強く意識していたと思われるのである。

## [ 2 ]

思えば、ラッセルとヴィトゲンシュタインの因縁は深い。既に世に出つつあった《数学原理》(1910—1913)に強く影響されて、1912年、ヴィトゲンシュタインがケンブリッジに入学、ラッセルに付いて論理学の研究に着手して以来のことである。ヴィトゲンシュタインは完全にラッセルの影響下にあった。第一次世界大戦でオーストリア軍に志願したヴィトゲンシュタインは、1914年の初め戦場から、論理学上の多くの問題に関するノートを含む短いタイプ印刷の原稿を、ラッセルへ送っている。この原稿は、やがて1918年に完成された《トラクタトゥス》<sup>2)</sup>の一部であった。1922年に出版されたこの本の英訳<sup>3)</sup>に、ラッセルは解説を書き、「誠実な哲学者は誰でも、本書を無視できない」と結んでいる。他方ラッセルは、1918年に公刊した《論理的原子論の哲学》<sup>4)</sup>の序文で、「私はこれらの発想を、私の友人にしてかつての弟子、ルードヴィヒ・ヴィトゲンシュタインより学んだのである」と述べている。二人の相互影響は強烈であった。そしてケンブリッジで結ばれたこの二人の思想家は、共に後のウィーンにおける論理実証主義運動の原流をなしてゆく。特に《トラクタトゥス》の

中心的思想は、論理的原子論を経て濾過され、そのある側面のみが過激に発展して、理想言語・検証可能性・形而上学の否定、等の理論に固まってゆく。

ところが、ヴィトゲンシュタインの思想は、1933年頃を境として《トラクタトゥス》の思想から変化してゆく。《トラクタトゥス》の中心的思想は、彼自らによって破壊されてゆく。彼の関心は数学や論理学から言語、特に日常言語へ転じてゆく。《哲学的考察》<sup>(5)</sup> (1929年1月—1930年9月) や、いわゆる《青本》と《褐本》<sup>(6)</sup> (1934—1935) と称する講義録は、この転換期の前後思想を物語っている。そしてヴィトゲンシュタインの後期の思想は、やがて《哲学的探求》<sup>(7)</sup> に結実してゆく。この本は2部からなり、1部は1936年—1944年、2部は1946年—1949年に書かれている。この本では、《トラクタトゥス》の中心的思想は、ほぼ完全に否定されたかのように見える。《哲学的探求》の序文で、ヴィトゲンシュタイン自身も語っている。「私は、自分が旧著の中で書いたことのうちに、重大な誤りのあることを認めなくてはならなかった。」後期のヴィトゲンシュタインは、前期のヴィトゲンシュタインを否定しているのである。そうだとすれば、これはまた同時に、後期のヴィトゲンシュタインはかつての自分の師であり、自分の思想形成に強く影響したラッセルを否定していることになる。ゲルナーの本が現われる20数年前、既にヴィトゲンシュタインはラッセルに挑戦していたのである。従ってラッセルも、「彼の《哲学的探求》に現われている後期の学説は、私には何の影響も与えなかった」<sup>(8)</sup> といっているし、その影響を強く受けてオックスフォードに興隆した日常言語学派にも全く関心を示さなかったのである。《拒否された書評》によって論争の火付役を果たした後で、ラッセルは次のように語った。「彼の《トラクタトゥス》が出たとき、私はひどく昂奮した。今ではそれほど良いとは思っていない。……しかし《トラクタトゥス》以後、彼は丁度オックスフォード哲学者のように、ますます私から遠ざかっていった。私はオックスフォード哲学を読むのを止めるようになった。……私はオックスフォード哲学者が好きでない。好きじゃないよ。彼らは些細なものを非常に大きなものにしてしまうのだ。彼らの使徒ライルもえらいとは思っていない。彼はただ利口な男だ。いずれにしても、公然とあの本の書

評を断ったのは、衝動的な振舞いだったことを認めなければならない。」<sup>(9)</sup>

ラッセルの哲学は徹頭徹尾、論理学、特に数学を基盤としていた。これに反し、ヴィトゲンシュタインの哲学は数学、特に論理学から日常言語へと転じていった。ゲルナーの本は、ラッセルの意を汲んで、この後期のヴィトゲンシュタインに銃口を据えつつ、その影響下において今を時めくオックスフォード学派の批判にあった。

### [ 3 ]

しかし私は、ラッセルが後期のヴィトゲンシュタインを評価する視点に、何か割り切れぬものを感じる。《トラクタトゥス》の解説を「誠実な哲学者は誰でも、本書を無視できない」と結んだその同じ人物が、ゲルナーの本の扉では、「後期のヴィトゲンシュタインは……真面目な思索に疲れてしまい……こういう怠惰な結果を生む学説が……」と酷評する。かつての親友が訣別していた友を非難する、——分らぬでもない。だが無論、こんな感情だけのことではあるまい。ゲルナーの本の扉で、ラッセルは更に続けていう。「《トラクタトゥス》では〈世界の理解〉が問題であったのに、《哲学的探求》では〈センテンスの理解〉だけを問題としている。……それは〈罪のない茶飲話〉である<sup>(1)</sup>。ここには、ラッセルのヴィトゲンシュタインを捉える視点とその限界が集約されているように思える。すなわち、ラッセルは《哲学的探求》と日常言語学派とを同じ眼で捉えているように思えるのだ。

確かに《哲学的探求》は、日常言語学派によってその思想の骨子がよく捉えられ発展させられているとは思える。しかし、何かひっかかるものを感じる。前期においてもヴィトゲンシュタイン自身、論理実証主義の非妥協的徹底的な実証性、技術的な分析やスコラの形式主義に批判的であった。この点についてはラッセルも同様な考えを示していた。少なくとも論理実証主義の徹底化の方向では、《トラクタトゥス》の他の特徴、例えば〈世界〉や〈語えぬりもの〉についての発想が脱落してしまう。後期においても、《哲学的探求》から日常言語学派への展開には、何か大きな脱落があるのではなからうか。

《言葉と物》を書いたゲルナー自身がいう。「オックスフォード哲学の一味の中で、私はオースチンに対して最も強い嫌悪を抱いていると思う<sup>(9)</sup>。」しかしライルと共に日常言語学派を支配していたオースチンの学的態度は、ヴィトゲンシュタインのそれとかなり違っている。いくつかの証言を引用しよう。ヴェド・メータは G・J・ウォーノックを訪れたとき、「オースチンはヴィトゲンシュタインの影響を受けましたか」と尋ねた。「いえ、いえ」とウォーノックは即座に答えた。「オースチンの遺稿のどこにも、彼が本当にヴィトゲンシュタインを読んだという証拠がありません。私は講義で一二度、彼がヴィトゲンシュタインの一二ページを声を出して読み上げたのを覚えています。それはいつも、このオーストリアの哲学者がいかに理解能力がなく曖昧であるか、どれほど簡単に彼を戯画化して片付けてしまえるかを示すためでした。」<sup>(9)</sup> またヴェド・メータは、エイヤーを訪問した折りのことを語っている。「〈ヴィトゲンシュタインとオースチンが、私の心の中でシャム双生児のようにくっついてしまったので、何とか分けてもらえませんか。〉エイヤーは答えた。〈ヴィトゲンシュタインは基本的な哲学の問題に関心をもっていましたが、オースチンは言語それ自体に関心をもっていました。しかしオースチンは、ゲルナーのいうように言葉の普通の意味での言語学者ではありませんでした。彼は言語学や言語の成長に関心をもっていませんでした。彼は単語の機能にだけ専心していたのです。〉彼はオースチンにとっての哲学は、人間にかかわりのない調査であり、ヴィトゲンシュタインにとっては深く人格にかかわるものであったという説に、いくらかの真実性のあることを認めた。事実ヴィトゲンシュタインは、自分自身を生きた哲学の問題と考えていたのである。」<sup>(9)</sup>

このように、ヴィトゲンシュタインにまつわるあれこれを考えてくると、彼の哲学は、前期は理想言語を中心とし、後期は日常言語を中心とするといった、単にことを言語分析にのみ終らせぬものを感じる。また今後の言語論哲学の課題を、ただ言語の厳密な規定に置く説<sup>(10)</sup>にも飽き足りぬものを感じる。現に S・トゥールマンの如く<sup>(11)</sup>、前期と後期とに別々のヴィトゲンシュタインがいるのではなく、ただ一人のヴィトゲンシュタインしかいない、と説く研究者も

いる。ヴィトゲンシュタインの哲学は、深く人格にかかわる、自分自身を生き  
た哲学の問題とする何かがあるのではないか。もしこの何かを解き明かす糸口  
でも見付けることができれば、それは論理実証主義に脱落している《トラクタ  
トゥス》の意味と、日常言語学派に脱落している《哲学的探求》の意味とを結  
びつける糸口になるかも知れない。

#### [ 4 ]

マルコムの伝えるところによると<sup>42</sup>，《トラクタトゥス》のヒントは、第一次  
世界大戦中のある日、オーストリア前線の塹壕で生まれた。ヴィトゲンシュタ  
インはある雑誌を読んでいて、自動車事故の様態を説明する記事に注目した。  
その記事は、自動車事故で起こりうる出来事の様態を、自動車の模型による連  
続的な図解で説明していた。そうすると複雑な自動車事故も、単純な出来事の  
図解の組み合わせによって説明できる。ということは、出来事の図解の各部分が  
出来事の構成要素と対応していることになるであろうし、更に類推すれば、文  
章の各部分と実在の構成要素の間にも、同様の対応関係を想像できることにな  
るかも知れない。ここには、あるヒントを造形してアイデアに高め、更にこれ  
を概念に構成する強力な構想力が読みとれる。

ともかく、《トラクタトゥス》の原案はでき上る。「命題は実在の写像である。  
我々が実在を考えるに依じて、命題は実在の模型となる。」(4・01)しかし命題  
が写像であるならば、我々が実在を考えるとき、この実在と写像とが対応する  
ための何かが必要ならぬ。それが「論理形式、すなわち実在の形式にほ  
かならぬ。」(2・18)

ところで、言語の最も基本的な単位(形式)は、最も単純な命題、すなわち  
要素命題(ラッセルのいう原子命題)である。実在の側でこの要素命題に対応す  
るのは事態(Sachverhalt)である。事態とは元来、物の在り方を現わしている。  
事態を更に分解すれば対象(物=論理的原子)、これに要素命題を分解すれば名  
辞(原子記号)が対応するが、いずれも論理的要請であって、この段階では意  
味をなさない。「命題のみが意味(Sinn)をもつ。命題の文脈においてのみ名辞

は意義 (Bedeutung) をもつ。」(3・3) ヴィトゲンシュタインはフレーゲの考えに従って、**意義**を〈ある名辞の指示するもの〉、**意味**を〈指示対象とかかわりなしに理解できるもの〉とする。従って名辞は意味をもたず意義のみをもち、命題は意義をもたず意味のみをもつ。ヴィトゲンシュタインはこの意義と意味との一つの総合として、〈意味のある命題〉を、常に真か偽のいずれかを明示できるものに限定する。すなわち、複合命題は常に要素命題に分析されてその真偽が問われるのである。こういうわけで、「事態の構成要素となりうることは物にとって本質的である。」(2・011) 同様に、要素命題の構成要素となりうることは名辞にとって本質的である。そして、要素命題のいくつかの複合(ラッセルのいう分子命題)と対応するのが**事実 (Tatsache)**である。最後に、〈世界は論理的空間における事実の総和〉と考えられる。従って世界の側で、対象—事態—事実—世界—の関係は、言語の側で、名辞—要素命題—複合命題—命題の総和—の関係と対応する。だからすべての要素命題を挙げれば、世界は完全に記述される。そして、対象が**実体**であり、「対象は世界の**実体**を作る。」(2・021) また**事態**が**実在**であり、「**実在**の総和が世界である。」(2・063)

こうして《トラクタトゥス》は、論理学を軸として統一的一義的な世界像を構築する。使用された方法は冷たい分析的方法であり、その背景にはデカルト以来の概念の明晰性がうかがえる。

しかし、**実在 (Realität)**とはこんなものなのか。アトムや事物の領域にのみ考えられるものか。アトムや事物の論理的構築物が世界なのか。あの自動車事故の例においても、事故の物理的原因だけを考えるならば、その意味は単純な出来事の組み合わせによって捉えることができるかも知れない。だが自動車事故の原因は、単に物理的原因だけではあるまい。自動車には人間が乗っている。その人の社会学的心理学的背景もある。事故を起こす状況は、むしろ色々複雑な人間社会の**からまり**を反映している。それは単なる分析によっては明らかにされない。経験的世界が問題になる。ヴィトゲンシュタインがこれに気付かないはずはない。

マルゴムの伝えるところによると<sup>(12)</sup>，《トラクタトゥス》を破壊するヒントは

1933年のある日、ケンブリッジの経済学講師、ピエロ・スラッファとの議論の中で生まれた。ヴィトゲンシュタインが、〈ある命題はそれが写像している事実と同じ論理形式をもつ〉という彼の持論を主張すると、このイタリア人は、あごの下あたりを片手の指先を外に一振りして撫でる手振りをした。それはナポリ人には馴染みのもので、一種の軽蔑を表わす仕種であった。彼はいった。「この手振り (Handbewegung) の論理形式はなんですか。」この質問はヴィトゲンシュタインに、《トラクタトゥス》の維持し難いことを洞察せしめたという。

実際の手振りは一つの事実である。手振りという言葉はその写像である。この事実と写像との共有する一義的な論理形式はあるのか。スラッファがあごの下を撫でたのは、そうすることによってヴィトゲンシュタインの主張を否定する動作であったろうが、同時に〈その手振りはどんな意味をもつか〉と問うている。ナポリ人には一種の軽蔑を表わす意味をもつとしても、その習慣や手振りの約束を知らぬ人にとってはどんな意味をもつか。また、その手振りを好意的なサインと解する種類の人々がいたらどうするか。あごの下を撫でる手振りに、固定した論理形式や一義的な意味などありはしない。写像と事実、命題と実在、一般に〈言葉と物〉の間には、一義的な対応関係などない。言葉と物の間には、非常に多義的な地平が開かれている。

しかしこう考えてくると、《トラクタトゥス》で設定された実在や世界の問題は、後期のヴィトゲンシュタインによって無視されるのか。実在や世界は喪失してしまうのだろうか。

## [ 5 ]

《哲学的探求》は冒頭から、《トラクタトゥス》の攻撃で始まる。その材料に、アウグスティヌスの文章「《告白》」が利用される。アウグスティヌスは幼い日に、大人たちの身振り (Gebärden) から初めて言語を学んだという。「大人たちがある物の名を呼び、そうしながらその方へ身体を向けたとき、私は彼らがある物を示そうとするときは、その物が彼らの発する声によって呼ばれるのだと



気づき、そしてこれを理解した。彼らの意図は……身振りから分った。』<sup>(7)</sup> (1) 彼はこういう経験をくり返しながらか、言葉がどのような物のしるしなのかを理解し、また言語の使い方を学んだという。

この説明では、言語と身体の動作は一緒になっている。「言語の一語一語が対象を名ざし、文章はそのような名ざしの結合である。」(1) ここに「どの語も一つの意味をもつという考えの根源がある。」(1) 「……意味は……語が指示する対象なのである。」(1)

思えばこの考え方は、かつての《トラクタトゥス》の意味論であった。語が対象を名ざすところに真の意味と実在の根拠をみ、世界はその論理的総和として把握される。しかし、あの、あごの下を撫でる手振りを、いま大人たちの身振りに譬え直してみれば分かる通り、語の直示的教えは意味をなさない。ヴィトゲンシュタインは、このことを色々な例を挙げて説明している。例えば、誰かが商人のところへ〈赤いリンゴ五つ〉と書いた紙片をもってゆくとする。すると、『商人は〈リンゴ〉という記号の書かれた引出しを開け、次に目録の中から〈赤い〉という語を探し出して、それに対応する色の標本を見付ける。次に、彼は基数——それを彼は空んじていると仮定する——を〈五〉という語まで口に出し、それぞれの数を口に出すたびに、標本の色をもったリンゴを一つずつ引出しから取り出す。……「しかし、どこで、どのようにして〈赤い〉という語を探し出し、〈五つ〉という語によって何を始めるべきかを、彼はどうして知っているのだろうか。』——いや、私は自分の述べた通りに彼が振舞うと仮定したのである。』(1)

人は〈赤い〉・〈リンゴ〉・〈五つ〉の意味を直示的に知っていない。〈赤いリンゴ五つ〉の意味は、各単語の意味から合成されてない。更にまた、人は〈赤いリンゴ五つ〉の意味も直示的に知っていない。この語句をみて、人は何を始めたらいのか。たまたま商人のところへこの語句を書いた紙片をもっていったのだから、この紙片の意味は、〈赤いリンゴを五つ下さい〉ということかも知れない。しかし、どうしてなのか。たとえ商人と客との関係であっても、そのときの状況によっては意味の疎通は完全でないかも知れない。例えばその紙片の

意味は、〈赤いリンゴ五つ届けてね〉とか、〈赤いリンゴ五つ不足していたよ〉とか、或は〈赤いリンゴ五つとは何か〉とか、〈この紙片に書いてある字は何と読むのか〉ということかも知れない。これは決して極端なこじつけではないであろう。「直示的定義は、どんな場合でも、どのようにでも解釈される。」(28)商人が紙片をみて何を理解するかは、「一定の教育が行なわれて初めて可能となる。異なった教育が行なわれれば、これらの直示的教えが同じであっても、全く異なった理解を生む。」(16)

かくてヴィトゲンシュタインは、語の意味を物の直示的教えから分離し、「語の意味とは、言語の中におけるその用法である」(43)という。人は名ざしつゝ、実は語の用法を教えているのである。この意味では、アウグスティヌスも知らぬうちに、「いわば意思疎通の一つのシステムを記述しているのである。」(3)

ところで、語の用法は一定の教育によって定まるといわれる。しかし語の用法は複雑多岐である。どのようにして教育されうるのか。この問題を説明する比喻として、ヴィトゲンシュタインは言語ゲーム (Sprachspiele) という重要な概念を導入する。「語の用法の全過程を、子供がそれによって自分の母国語を学ぶゲームの一つだと考えることもできる。私はこうしたゲームを〈言語ゲーム〉と呼ぶ。」(7) 語の教育とは語の用法を教えることであるが、それは言語ゲームを学ぶかたちで行なわれるという。更にヴィトゲンシュタインは続ける。「……私はまた、言語とそれが織り込まれた諸活動の全体をも〈言語ゲーム〉と呼ぶ。」(7) 気にかかる表現である。

## [ 6 ]

まず普通の〈ゲーム〉を考え、それから〈言語ゲーム〉、〈諸活動の全体〉と順を追って考察してゆこう。

さて、ゲームはどのようにして学ばれるか。チェスを例にとろう。「誰かに西洋将棋の王将を示して、〈これがチェスの王様だよ〉といっても、それによってこの駒の用法が説明されたわけではない。」(31) 最もよいことは、彼がこのゲームの諸規則をすべて既に知っていることであるが、そうでなくとも観戦す

ることによって単純な盤台ゲームから複雑なゲームを理解したり、既に類似した何か他のゲームをしたことがある場合でもよい。ともかくゲームを知るためには、単なる直示的教えは意味をなさない。まず〈ゲームの駒とは何であるか〉を知っていなければ、〈これが王様で、これこれこういう風に動かすことができる〉という直示的説明も、教わる者の理解を何ら助けない。ゲームの規則(用法)を知ることが先なのである。それがなければ、いくら経ってもゲームの意味は明らかにならない。また注意することは、チェス・ゲームは一種類とは限らぬことである。チェス・ゲームの規則を色々と変え、色々なゲームの仕方を考えることができる。〈チェスをやろう〉といえ、あのやり方だな、と決めてかかることはできない。それは一つの習慣(型)にすぎない。ただ一つの理想的なチェス・ゲームなどないのである。そしてゲームの規則が変れば、駒の意味も変る。規則が変りすぎれば、駒は意味をなさなくなることもあろう。

チェス・ゲームについていわれたことは、そのまま〈言語ゲーム〉についてもあてはまる。彼はいう。「名ざすだけでは、まだ言語ゲームに携わることにならない。——チェスの駒を立てただけではチェス・ゲームの指し手にならないのと同様である。ある物を名ざしただけでは、まだ何もなされてない、ということが出来る。言語ゲームの中でなければ、物の名前すら意味をもたない。」(49)ある言葉がある意味をもつのは、一定の言語ゲームの中においてである。例えば、〈チェス盤は合成されている〉という言葉を考えてみよう。多分、これは32の白い正方形と、32の黒い正方形から成る合成物を考えているのであろう。しかしこれはまた、白と黒の色、及び正方形の綱という形式から合成されている、とも考えられる。更に別な見方、考え方も可能である。「もしこの場合、全く異なった色々な観察方法があるとしたら、あなたはその場合でも、なおチェス盤は絶対に〈合成されている〉といい張るだろうか。」(47)〈合成されている〉という言葉の意味も、一定の言語の文脈の中で、一定の文脈の取り決め・約束において初めて意味をもつのである。文脈が変れば、言葉の意味も変る。文脈が変りすぎれば、言葉は意味をなさなくなることもあろう。言葉が空回りし、無意味となるのである。

ところで、ヴィトゲンシュタインは言語ゲームの例として、次のようなものを挙げている。「命令する、そして命令に従って行動する。——ある対象をその外観や計測によって記述する。——ある対象をある記述（製図）によって製作する。——ある成り行きを報告する。——その成り行きについて推量する。——ある仮説をたて、検証する。——ある実験の結果を図表によって表わす。——物語を創作し、読む。——劇を演ずる。——輪唱でうたう。——謎を解く。——冗談をいい、それを話す。——算術の応用問題を解く。——一つの言語を他の言語へ翻訳する。——願う、感謝する、ののしる、挨拶する、祈る。」<sup>(23)</sup>こんな例を挙げたらきりが無い。無限である。しかし、類似性のあることに気付く。これらの表現はすべて、人間における言語生活の諸相を描写している。諸科学から日常生活や宗教生活までの、人間の諸活動のすべてを表現している。言語は我々の生活の中にある。言語ゲームも我々の生活の中にある。「一つの言語を想像するということは、一つの生活様式を想像することである。」<sup>(19)</sup>ある人の言葉を借りれば、「一定の言語の中に見出される言語ゲームは、話す人の生活様式を表現している。」<sup>(24)</sup>だからヴィトゲンシュタインもいう。「〈言語ゲーム〉という言葉は、ここでは言語を話すことが一つの活動、或は一つの生活様式の一部である、ということを強調するのだからなければならない。」<sup>(23)</sup>

すると、こんなことが考えられる。ある言語（各辞・命題）は、ある言語ゲームの中で一定の意味と用法をもつ。しかしこの関係は固定しているわけではない。他の言語ゲームの中では、また別な意味と用法をもつ。言語と言語ゲームとは入れ換えがきく。言語と言語ゲームの間は、原理的に自由であり、何か自由に結合してはまた自由に分離する、流動的・活動的な関係にあるように思える。別ないい方をすると、各言語ゲームは衝突することなく、言語を自己の文脈の中へ自由に嵌め込んだり取り外したりしているように思える。そしてこのような関係を可能にしているのが、〈一つの活動、或は一つの生活様式〉としての言語ゲームの特徴のように思える。〈言語ゲーム〉における言語は、単なる語の用法ではない。それは一つの生活様式、生活活動なのである。ヴィトゲンシュタインは、「〈記号〉・〈語〉・〈文章〉などの適用の仕方には無数の異なった

種類がある」と書いた後で、続けて次のように説いている。「そしてこの多様さは固定したものでなく、一望のもとに与えられているとは限らない。新しいタイプの言語、新しい言語ゲームが、いわば発生し、他のものはすたれ忘れ去られてゆく。」<sup>(23)</sup>

マルコムも指摘する如く<sup>(14)</sup>、〈言語ゲーム〉を〈生活様式〉と結びつけて考えることは確かに重要である。〈言語〉と〈ゲーム〉の類似性を否定するスマートすら、この結びつきを「デカルトの $\dot{\text{C}}\dot{\text{o}}\dot{\text{g}}\dot{\text{i}}\dot{\text{t}}\dot{\text{o}}$ 」のように議論の余地なき基礎<sup>(15)</sup>とみなしている。我々はこの連関を念頭におきつつ、更に言語ゲームの意味を検討してゆかねばならない。

[ 7 ]

ヴィトゲンシュタインは自問してみる。「お前はたやすいことばかりやっている。お前は可能な限りのあらゆる言語ゲームについて語る。しかし一体、言語ゲームの本質は何か、従って言語の本質は何かを、お前はどこにもいっていない。……だからお前は、かつて最も自分の頭を悩ました研究の部分、すなわち命題の一般形式と言語の一般形式に関する部分を、まさに断念しているのだ。」<sup>(65)</sup> ヴィトゲンシュタインは、これを事実だと認める。かつて《トラクタトゥス》で試みたような、「言語と名付けるものすべてに共通なもの、諸現象のすべてに対して同じ言語を適用できるような共通なものなど、一つもない。」

<sup>(65)</sup> そのかわり、「それらは互いに多くの異なった仕方で類似している (*verwandt*) のだ、といっているのだ。そしてこの類似性またはこれらの類似性のために、我々はそれらの諸現象をすべて〈言語〉と呼ぶのである。」<sup>(65)</sup> 例えば、盤を使うゲーム、トランプ・ゲーム、球戯、競技などを考えてみる。何がこれらのゲームに共通しているか。共通性はない。あるのは類似性や親近性である。「我々は、互いに重なったり交叉したりする複雑な類似性の網の目を見、大まかな類似性や細やかな類似性の網の目を見ているのである。」<sup>(66)</sup> このような類似性を、ヴィトゲンシュタインは〈家族的類似性〉 (*Familien-ähnlichkeiten*) と名付ける。「なぜなら、一つの家族の構成員の間に成り立つ多様な類似性も、例え

ば体格、顔の特徴、眼の色、歩き方、気性などのように、同じく重なり合い交叉しているから。——だから私は、〈ゲーム〉は一つの家族を構成する、とおう。」(67)

このような連関から捉えられる言語ゲームは、そんなに輪郭のはっきりしたものではない。それは家族的類似性をもつといわれる。「あらゆる場合が規則によって制限されているとは限らない。例えば、どれほど高くテニスのボールを打ち上げてよいのか、どのくらい強く打ってよいのか、といったことに関する規則などない。しかし、テニス是一个のゲームであり、規則もまたもっている。」(68) ゲームは規則だけで成り立っていない。ゲームの説明には、ゲームを記述してみせ、更に加えて「こうしたもの、及びこれに似たものを〈ゲーム〉という」(69) と説明しなければならない。「〈ゲーム〉という概念は、輪郭のぼやけた概念」(71)である。境界線がそれほど明確に定まってない。いわばピンボケである。数学や論理学の〈形式〉や〈規則〉は、その一つの極端な抽象であるといえる。「しかし、はっきりしない概念は、そもそも概念なのか。……〈どこかこの辺に立っている〉ということは無意味だろうか。」(71) 〈どこかこの辺〉という説明は、確かに不正確である。しかし「なぜ人は、それを〈不正確〉と呼んではいけないのだろうか。……それは〈使用不能〉ということではないのだから。」(88) 〈時計を正確な時刻に合わせる〉という場合、この正確さはどの程度、正確なのか。〈食事にはもっと時間を厳守してこなくてはならない。正確に1時から始まるのを知っているだろう〉といった場合、このような正確さはどのような正確さなのか。実験や天文台の時刻決定の正確さは、どのようなものか。〈不正確〉は非難され、〈正確〉は称賛される。それは、〈不正確〉は〈正確〉ほど完全にその目的を達成しないからであろう。しかしその場合、何を〈目的〉と呼ぶのか。太陽までの距離を1メートルまで正確に述べず、家具師に机の幅を0.001ミリまで正確にいわないと、不正確なのか。いや、「正確さの理想像など一つも用意されてはいない。」(88) 〈正確さ〉の意味は文脈によって異なる。「語は色々な意味を一家族分もっている。」(77) 語はこの家族的類似性の中ならば、空回りせずには有意義に使用できる。そして語はその中で、互いに重な

ったり交叉したりする複雑な類似性の網の目として生きている。

ここまでくると、生活様式としての言語ゲームは、単に道具的機能や生活の型といったものにつきぬ様相をおびてくる。生活様式 (Lebensformen) という言葉において、Formen(単数 Form) は形式とも訳せる。すると〈形式〉という語は、何か整然とした規則、数学や論理学などで用いられる形式が強く印象付けられるかも知れない。しかしそのような〈形式〉は Form の極端な抽象である。生活様式は一つの活動、生活活動なのである。更に、Leben が生命とか人生とも訳せることを思えば、生活様式は一つの生命活動であることを物語っている。このような言語を操る仕組みは、どのようにして可能なのだろうか。

[ 8 ]

ヴィトゲンシュタインは、かつて《トラクタトゥス》で書いたこと (5.5563) を布敷して、次の如く述べている。「——思考の本質、すなわち論理は、一つの秩序、しかも世界のア・プリオリな秩序を描き出す。つまり、世界と思考とに共通でなくてはならないような可能性の秩序を描き出す。しかしこの秩序は、最高に単純でなくてはならないように思われる。それはすべての経験に先立って在り、全経験を貫抜しているのでなくてはならない。それ自体には、どんな経験の濁りも不確実さも付着してはならない。——それはむしろ、最も純粋な結晶体でなくてはならない。」(97)

しかし、《哲学的探求》のヴィトゲンシュタインは反省する。「我々が現実の言語を厳密に考察すればするほど、現実の言語と我々の要求との間の衝突が激しくなる。(論理学の透明な純粋性といったものは、私にとっては現実の言語の考察から生じたものでなく、一つの要求だったのである。)その衝突は耐え難いものになり、その要求はいまや空しいものになろうとしている。——我々は滑らかな氷の上に迷い込んでいる。そこには摩擦がないから、諸々の条件はある意味では理想的だが、まさにそのために、我々は前進できない。我々は前進したいのだ。だから摩擦が必要なのだ。ざらざらした(rauhen) 大地に戻れ!」(107)

《トラクタトゥス》の世界は論理の世界である。そこでは第一に、言葉と物

とが名辞とその指示対象との対応を根底として一義的に結合している。対象の写像としての名辞は論理的要請であり、せいぜい対象を〈これ・あれ〉としか指示できない。従って対象も論理的要請である。淀んだ空間の背後に、純粹で透明なリアリティが要求されている。第二は、このように名辞—意義—指示対象にリアリティがおかれるため、〈意味のある命題〉は常に真か偽かのいずれかを明示できるものに限定される。このような硬質の論理で閉ざされた空間の中では、言語はロウ人形の如く生氣なく、物は単に死せる物体である。論理的空間における事実の総和としての世界は、最も純粹な硬質の論理による結晶体である。哲学は実在や世界を扱いながら、人間を問題とすることがない。その哲学は、いわば人間不在のモザイク的構築物にすぎない。モザイク (mosaic) には他にモーゼ的 (Mosaic) という意味があるが、これは一定の厳しい戒律をもつモーゼの律法 (Mosaic laws) を予想する。そこはどうてい人間の自由に活動しうる世界ではない。これに対し《哲学的探求》は、言語の用法を扱う。「我々は言葉をその形而上学的用法から、再びその日常的用法へと連れ戻す。」

(16) 生活様式としての言語ゲームは、言語の日常的用法の問題と結びつく。

さてそうすると、非常に厄介な問題が生じてくる。言語の日常的用法においては、一般に言葉と物、その根底をなす名辞と対象の対応関係はどうなるのかという問題である。無論、言語の用法を扱う以上、《哲学的探求》は言語と物、名辞と対象との対応関係を否定する。「——重要なのは、人々が〈意義〉という言葉によって語に対応する物を表示するのであれば、この言葉は語法に反する用いられかたをしているという点を確認することである。これは、名の意義とその名の担い手とが混同されているということである。N・N・氏が死ぬとき、その名の担い手が死ぬのであって、名の意義が死ぬとはいわない。ところが、このように語ることは無意味であろう。なぜなら、その名が意義をもつのを止めたのであれば、〈N・N・氏が死んだ〉ということは意味をもたないであろうから。」(40)このように、〈N・N・氏が死んだ〉という言葉は、その担い手が存在しなくとも言語ゲームの中へ取り上げられ、意味をもつ。すなわち、N・N・氏という名の意義はN・N・氏という存在から離れて、文脈の中で初めて



意義をもつ。意義は意味の中で意義をもつ。意義の意味化が行なわれているのである。名辞が〈これ〉とか〈あれ〉とかいって物を指示するとき、実は既にその指示の背景に何かを指示させる意味作用の働きを予想している。意味があって初めて、名辞や意義や指示機能の働きさえも有意味となる。更に名辞を含む命題も、より広い文脈の中で色々な意味をもつ。文脈の中では、名辞や命題も同じ扱われ方をする。文脈や意味は対象を構成する。これが言語ゲームの様相である。従って《哲学的探求》の主眼は、名辞—意義—指示対象になく、命題—意味—理解におかれる。〈意味のある命題〉は、真偽を離れ、文脈の中での語や命題の妥当・非妥当の領域に拡大される。

しかし注意を要する点がある。《トラクタトゥス》における名辞や物は論理的要請であったが、《哲学的探求》における名辞や物は実際に日常的な物の名であり、具体的な物なのである。無論、言語を扱う哲学として、《哲学的探求》は物を扱わない。物と切断して、名辞から出発する。そして名辞を言語ゲームの中に繰り込む。しかし、この作業を遂行することは、決して物の存在を否定することにはならないであろう。それは、ただ扱わないのである。言語論哲学の問題領域としないだけである。言語論哲学としては、〈対象が存在するかしないか〉も一つの言語ゲームの問題になってしまう。或は言語の妥当な用法であるかどうかの問題になってしまう。しかし、言語論哲学のこの自己完結的な方法論を恐れずに敢えていえば、それでもなおかつ、物の存在は否定されていない、否むしろ何らかのかたちで前提されているということができると思われる。言語は確かに物の存在から自由である。自由に扱うことができる。だが既に作られた言語や言語ゲームの問題でなく、言語や言語ゲームがまさにいま作られてゆく創造活動の問題を考えると、物の存在を前提とすることが非常に重要になってくると思われるのである。節を改めよう。

[ 9 ]

〈チェス盤〉を例にとろう。〈チェス盤〉という語は、〈チェス盤〉という物でもある。この段階では、〈チェス盤〉という名辞が単に〈チェス盤〉という物を

指示していると考えられる。従って〈チェス盤〉の意味は全く不明である。命題の中に取り入れられ、〈このチェス盤は木で作られている〉〈このチェス盤は合成されている〉・〈このチェス盤は立派だ〉・〈これはチェス盤だ〉という表現になれば、一定の文脈からその意味を把むことができる。しかし現在の問題は、このような語の意味や用法のことではない。問題は〈チェス盤〉という物である。事物としての物である。もしこの物が実際に存在し、木で作られており、合成されていなければ、上のような命題は述べられないはずであり、立派であるとも評価できないはずである。更に〈チェス盤〉という物も、初めはある着想・理念に従って——この場合、ある言語ゲームに従って、といてよいであろうが——矢張り材料としての物から作られている。そして後からも、絶えずその機能が色々と開示されてゆく。言語はその本質において、一面、物との直接的な結びつきを離れ自由にあやつれるものでありながら、他面、物の世界、感覚的に捉えられる事物の世界と絶えず交流している。物の構成・創造は、言語と物との相互作用から生れるということができる。言語が色々な文脈の中で色々な意味を活用できるということは、同時に物もこの言語の用法に応じて色々な働きをもっているということを物語っている。言語に色々な用法があれば、それだけ物にも働きがある。逆にいえば、物の働きが色々実践的に発見されてゆき、それに応じて色々言語の用法も増加してゆく。物は硬質の単なる物体ではない。それはソフトな、弾力のある物体である。物は働きかけや創造を許す。実験や発見や発掘を許す。物は考古学的な解説も未来学的な構成も許す。

しかし、以上のことが可能であるためには、言語と物との間に、必然的に人間の実践的・行為的空間を認めなければならない。人間は物に働きかけ、実験し発見し、発掘し解説し、構成する。この過程で、物が意味化し、意味が物化する相互作用が働いている。現実の世界に、人間の創造的行為を媒介とした言語と物との実践的な相互作用を前提としなければ、言語や言語ゲームについて語ることは無意味であろう。言語や言語ゲームがそもそも作られることができないからである。言語や言語ゲームは、人間の実践的な創造行為の過程で作られ

てゆくのである。元来、生活様式—生活活動—生命活動の脈絡で考えられる言語ゲームの根源は、ここにあるということができよう。私はこのように言語と事物としての物との間に考えられる実践的行為的空間を、人間における第一次の生活空間と名付けておこう。

しかし、このような第一次の生活空間は、そこで人間が実践的行為的活動をする場所であるとしても、まだ非常に狭い物理的実用的空間でしかない。日常言語としての言語には、直接に物から離れてもっとそのシンボルとしての機能を発揮しうる広大無辺の空間があるはずである。ヴィトゲンシュタインが言語ゲームの例として挙げた用語をいくらか再現してみよう。「命令する。ある成り行きを報告する。物語を創作し、読む。謎を解く。冗談をいう。願う。感謝する。ののしる。挨拶する。祈る。」これらの言語は直接に物を指示してない。また物の機能と直接に対応してもいない。しかしこれらの言語は、人間の第一次の生活空間における言語と質を異にして、人間の実践的創造活動の成果を如実に表現している。

ところで、これらの言語は文脈によってその意味が解読されるまでは、一種の物と考えることができる。事物としての物は意味付けによって生氣を与えられる。同じ様に、言語としての物も意味付けによって生氣づく。しかも言語は、例えば〈ののしる〉とか〈祈る〉という言葉の如く、どんな文脈から意味付けがなされるかによって、人間にとって物質よりも固い物の役割も柔い羽根の役割もする。従って歴史上の記録や文書も、ありとあらゆる活字も話し言葉も、その意味が解読されるまでは一種の物である。このような意味と物(言語)との間には、第一次の生活空間と次元を異にする歴史的文化的な空間が広がる。その空間は、人間の創造行為によって無限に広がる。私は意味と言語との間に考えられるこのような実践的行為的空間を、人間における第二次の生活空間と名付けておこう。いずれにしても、対象の構成は、人間における言語活動を媒介としているのである。私は、この二つの生活空間、そしてこの二つの生活空間の織りなす世界で、実践的創造活動をする人間存在を基礎としなければ、生活様式としての言語ゲームの様相は明らかにされないのではないかと考えるのであ

る。この点では、人間は直接に言語ゲームの中で生活し、言語ゲームの創造活動に従事しているが、ヴィトゲンシュタインのいう哲学は、むしろこのような人間学的基礎の上に出来上った言語ゲームの交通整理に重きをおいているとみることもできよう。

さて、二つの生活空間は、どちらにしても人間がそこで生活している空間である。そこはざらざらした大地である。経験の世界である。空気がある。不透明で淀んでいる。輪郭がぼやけている。その中では、明確に境界線も引けないような言語が無数に重なったり交叉したりして、複雑な網の目を作っている。しかもこの多様さは固定していない。新しいタイプの言語、新しい言語ゲームが絶えず発生し、他のものはすたれ忘れ去られてゆく。言語は生きています。意味も生きています。物も生きています。すべてが経験的世界の中で生きています。——このように家族的類似性をもつ言語活動には、何か有機体の新陳代謝を連想せしめるものがある。この有機体は、絶えず自己を対象化しつつ主体であり、部分でありつつ全体であり、同化しつつ異化し、区別されつつ統一し、分離しつつ結合し、分解しつつ統合している、といった一個の生物を連想せしめる。

もしヴィトゲンシュタインの後期哲学の根底に、かかる有機体における諸活動が連想されるとすれば、彼の哲学は単に言語の分析でなく、更にその基底に分析によっては明らかにされえない、構成的総合的な世界が開かれてくるように思える。その世界はシュペヒトのいう言語論的な存在論によって開かれる地平であるといいえども<sup>10)</sup>、その存在論はカント的な対象の形式的・一般的構造の基本的特徴の探求でなく、経験論的な世界の中であって、生物学的生命論的な人間存在の探求を予想するものでなければならない。

#### [10]

さて、《哲学的探求》における哲学が、このような意味で言語論哲学といわれるとするならば、この哲学は実在の問題を考えてないのか。もしくは否定しているのだろうか。

トゥールマンの挙げる例<sup>11)</sup>で考えてみよう。〈水中の棒は曲ってみえる〉とい

う言葉は、日常経験を表わしている。これに対し〈本当は(in reality=really) 曲ってない。それは光の屈折によるのだ〉という言葉は、光学理論を表わしている。この場合、〈reality〉という語が伝統的にもつ実在論的意味から、科学理論の方だけを真とすることは誤りであろう。水中で棒の曲ってみえる経験は、感覚的真実である。また、〈このテーブルは堅い〉という日常的概念と、〈このテーブルをアルファ線が通過する〉という科学的概念とは矛盾しない。常識と科学とは、語の用法(基準・規約)が相違するだけで両立しうる。この語の用法による実在の多様化は、科学言語よりか日常言語の方が比較を絶して著しいであろう。このように言語の用法の整理(交通整理)によるリアリティの多様化は、それだけまた世界を多様化する。本当はといえる用法が無数に考えられる。このような考え方においては、形而上学的実在は否定される。唯一の真実在など存在しない。在るのは、基準や規約の相違によって明らかにされる多数の、無数の実在である。

このように言語に無数の用法があるということは、それを可能にする経験的世界が、多面的多形的多値的になりうることを物語る。実在は唯一ではなく、喪失したのでもなく、いわば無数化したのである。そこは人間の創造する世界であり、また創造した世界である。この世界では、人間が無数の言語や言語ゲームを創り或は棄て、結合し或は分離し、よりわけ整理しながら生きている。人間はもつれた言語をかきわけ、いわば交通整理をしながら、統一と調和のとれた人間像を維持しようと努めている。言語の活動する経験的空間、それは言語活動をする人間社会の空間の広がりの意味する。人間はこの空間を絶えず実践的行為的に構成し続ける。拡大し続ける。そして人間の言語活動が鈍れば、その空間の広がりもそれだけ縮む。活動が止まれば空間は無くなる。言語も物も死ぬ。そして人間も死ぬのである。

人間の創造したもの——それは言語の実際的用法である。それは、諸科学から日常生活に至るまでのあらゆる言語の用法によって表現される。哲学はいかなる場合にも、そのような言語の実際的用法に抵触してはならない。「それは、すべてのものを、そのあるがままにしておく。」(124) 人間は活動し創造する。し

かし、そのためにはその前に、哲学による言語の交通整理が必要である。

「およそ新しい発見や発明がなされる以前に可能なものを、人は〈哲学〉と呼ぶことができよう。」(126)「哲学の仕事は、一定の目的のために諸々の記憶を寄せ集めておくことである。」(127)

ヴィトゲンシュタインはいう。「哲学における私の目的は何か。——ハエ取壺から脱け出る道を、ハエに教えることだ。」(309) この場合、ハエは語を指しているともとれようが、むしろ人間を指す比喻とみてはどうか。ハエ取壺とは、人間生活を小さな空間に閉じこめ、殺してしまう堅い事物と言語のもつれの合作と考えてみてはどうか。ハエはハエ取壺から脱け出れば、ハエに限られた空間を自由に飛び回る。ハエのように賤しくはかない生物であっても、人間も堅い事物と言語のもつれに閉ざされた空間から脱け出れば、そこには自由に活動する世界が開かれている。その世界は純粹でも透明でもなく、摩擦のあるざらざらした大地である。人間はしかし、その中にしか生きることができない。

ラッセルはいった。「《トラクタトゥス》では〈世界の理解〉が問題であったのに、《哲学的探求》では〈センテンスの理解〉だけが問題になっている」と。しかし、《哲学的探求》は、矢張り実在や世界の理解を問題としているのである。

ある哲学者は強調する。「分析哲学は、現実の経済的社会的基礎や歴史、階級等の問題を無視している。」<sup>(10)</sup> ゲルナーの本も主張する。「過去の哲学者は、世界を変革し、政治生活に指針を与えることに誇りを感じていた。しかるに言語論哲学は……。」<sup>(11)</sup> しかし、これは結局、哲学というものにどこまで期待するかの相違のように思われる。言語を扱う哲学は、「語ることのできないものについては、沈黙しなければならない。」<sup>(12)</sup> (6・54)

ヴィトゲンシュタインはいう。「哲学の方法が一つしかないというようなことはない。実にさまざまな方法があり、いわばさまざまに異なった治療法があるのだ。」(133)ヴィトゲンシュタインにとって、哲学とは、言語を通して開示した生命論的人間学の一つの予備学だったといえるであろう。マルコム記憶するところによると、ヴィトゲンシュタインは、「表現とは生の流れの中においてのみ意味をもつ」<sup>(13)</sup> と語っているのである。

(付記。この論文を書きながら、私はヴィトゲンシュタインの系譜に、ふとクローチエ、デイルタイ、マイネッケ、オルテガといった生の哲学者たち、そして彼らの歴史哲学が浮んだり消えたりした。他方また、プラグマティスト、パースやデューイの思想との連関を考えてみた。書き終えた現在、これらの思想とヴィトゲンシュタインの思想が結びつくのかどうか、それとも私自身の日頃の関心がヴィトゲンシュタインの思想と二重写しになっているのではないか、そんなことをしきりと考えている次第である。)

Anmerkungen

- (1) Gellner, E., *Words and Things*, London, Victor Gollancz, 1959.
- (2) Wittgenstein, L., *Tractatus Logico-philosophicus*, Schriften von L. W. Band I, Frankfurt, a. M. Suhrkamp, 1963.
- (3) Wittgenstein, L., *Tractatus Logico-Philosophicus*, London, Routledge and Kegan Paul, (1922), 1963.
- (4) Russell, B., *The Philosophy of Logical Atomism*, London, George Allen & Unwin Ltd, 1918.
- (5) Wittgenstein, L., *Philosophische Bemerkungen*, Schriften von L. W. Band 2, Frankfurt, a. M. Suhrkamp, 1964.
- (6) Wittgenstein, L., *The Blue and Brawn Books*, New York, Harper and Row, 1958.
- (7) Wittgenstein, L., *Philosophische Untersuchungen*, Schriften von L. w. Band I, Frankfurt, a. M. Suhrkamp, 1963.
- (8) Russell, B., Wittgenstein and Russell, *Encounter*, Jan. 1959.
- (9) Metha, Ved., *Fly and Fly-bottle*, Boston, Little, Brown and Company, 1961.
- (10) Warnock, G. J., *Contemporary Moral Philosophy*, New York, Macmillan, 1967.
- (11) Toulmin, S., Ludwig Wittgenstein, *Encounter*, Jan. 1969.
- (12) Malcolm, N., Wittgenstein, *The Encyclopedia of Philosophy*, Vol. VIII, New York, Macmillan and Free Press, 1967.
- (13) Hartnack, J., *Wittgenstein und die moderne Philosophie*, Stuttgart, W. Kohlhammer, 1962.
- (14) Malcolm, N., Wittgensteins > *Philosophische Untersuchungen*, < Frankfurt, a. M. Suhrkamp, 1968.
- (15) Smart, H. R., *Language-games*, *The Philosophical Quarterly* 7, 1957.
- (16) Specht, E. K., *The Foundations of Wittgenstein's Late Philosophy*, Tr, Walford, D. E., Manchester University Press, 1969.
- (17) Toulmin, S. E., *The Place of Reason in Ethics*, Cambridge University Press, 1958.
- (18) Schwarzman, K. A., *Ethik ohne Moral*, Berlin, Dietz, 1967.
- (19) Malcolm, N., *Ludwig Wittgenstein: A Memoir*, London, Oxford University Press (1958), 1966.